

未来の発見者たち：ペトラルカ <池上俊一>**魂を導く言葉と対話**

相手の言葉を、胸の底にも頭の中にも届かない先に素早く掬いとり、それを機械的な刺激として、条件反射のように相手に言葉を返す。この種の軽く短い言葉の高速のやりとりが、増殖しながら、巷に、ネット上にと、蔓延している。それなりのコミュニケーションがなりたち、情緒安定効果もあるものであろうが、言葉とは、本来、魂を映し出し、それを発する人も受け止める人も、その内面から変える力をもっていたこと、そして将来ともそうありうることを忘れないために、イタリアの抒情詩人にしてルネサンス人文主義の先駆者たるフランチェスコ・ペトラルカ（一三〇四～一三七四年）の例を見てみよう。

ペトラルカは、長年にわたる古代作家の文献学的研究から、言葉の正しい使用法、文法の重要性を確信した。彼にとっては、はじめから情念の調和など存在せず、それは、言葉によって創られるのであり、内面の習慣と言葉とは、たがいに対応していた。彼は言う——「言葉が外に出ようとするとき、魂はこれを整えて欲するとおりの形態を与え、言葉は外へ出て、魂がどのようなものであるかを告げ知らせます」。

言葉が魂を導き、形作るという言葉への信仰は、彼が南フランスのアヴィニオンで、政治の荒波に巻き込まれて痛いほど味わった、攻撃的な現実への防波堤ともなっていた。『親近書簡集』に、作者を真綿のように優しく包む言葉の甘い作用がいくつも書き連ねられているのは、そのためだ。

さらに人間同士の交わす言葉、会話には人を高める力があり、一千年の時を隔てていようと、広大な砂漠を間に挟んでいようと、時空を越えて人と人とを結びつけ、人のこころを元気づけ慰めてくれる、というのが彼の持論であった。言葉を交換しながら、感情と興味を伝え合う書簡の頻繁なやりとりは、聖なる友情の輪を波紋のように広げる魂の交流だと信ずるペトラルカは、夥しい書簡を書いた。しかも友人知人ばかりか、古代人への手紙、自分自身への手紙、さらには、後世への手紙まで、したためている。

そして『わが秘密』という自伝的書物では、名誉にとり憑かれた己の魂の病を癒すために、導師聖アウグスティヌスと対話をするという設定のもと、内面の葛藤がさらけ出され、冷静な自己分析が行われている。仲間との豊かな対話、これは自分自身との対話すなわち反省と表裏の関係にあることをペトラルカから学んで、言葉を磨きたいものだ。

(いけがみ・しゅんいち 東京大学助教授・ヨーロッパ中世史)